

第5章 総括

1 調査成果

墳丘 隅切方墳あるいは変形八角墳ともみなしうる平面形態だが、墳丘を構成する長辺と短辺が厳密には直線とはならず、緩やかな湾曲をなす。墳丘裾の高さが一定しない点からも、墳丘形態にみる規格性はやや乏しい。したがって、最終的な調査所見としての墳丘形態を「隅切方墳」とする。墳丘主軸は、埋葬施設の主軸と一致するほぼ正南北にとる。墳丘規模は南北約10m、東西10～11m程度に復元される。墳丘斜面には段築はみられず、外護列石や葺石といった外表施設を備えない。

埋葬施設 墳丘南側に南に開口する横穴系の埋葬施設である（第50図）。主軸は、 $N-1^{\circ}37'37''-W$ をとり、北側がわずかに西へ振る。横口をもつ刳拔式石棺を玄室とし、前面に羨道と前庭部を備える。玄室では流紋岩質軽石火山礫凝灰岩（荒島石）、羨道と前庭部では安山岩（和久羅山デイサイト）を用材とする点を蛍光X線分析により確認した（図版29-3、第4章亀井・岩本・大橋論考）。

玄室は天井内面を屋根形に、棺身に相当する部分を箱形に刳り抜いて横口を穿つ。横口は刳り抜き玄門と同じ構造である。横口の周囲に閉塞石を受けるごく浅い刳り込みがある。羨道は大型の板石を立てて腰石とし、その上に小ぶりの石材を平積みして壁体とする。壁体の上には一石の大型の板石からなる天井石が架構される。前庭部は天井石のない空間であり、壁体は羨道から一体的に構築される。

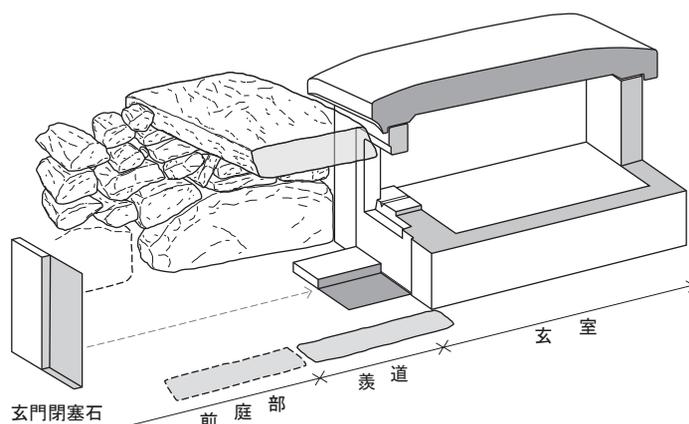
埋葬施設は全長およそ7mであり、玄室内法が全長1.64m、最大幅71cm、最大高70cmである。玄室外法は棺身部分が全長約1.95m、幅約1m、高さ約1mであり、天井石を含めると全長約2.2m、幅約1.5m、高さ約1.35mとなる。玄門は幅約45cm、高さ約35cmである。一枚の板石により玄門を閉塞する。羨道は幅約1m、長さ約1.1mと非常に短く、高さも90cmと低い。羨道の閉塞方法は不明である。前庭部は、羨道付近はその幅を同じくし、外方へと幅が広くなり、長さは3mほどと推定される。

築造方法 古墳は丘陵が形成する浅い谷部に立地し、後背部を削り出す山寄せの古墳である。そのため、墳丘の築造にあたって地山の利用が制限され、結果として大部分を盛土によって構築する。

墳丘の築造は、①選地→②基盤造成（整地）→③一次墳丘構築→④玄室設置・加工→⑤羨道壁体構築→⑥羨道天井石設置→⑦玄室天井石設置→⑧墳丘の完成、という工程に復元できる。このうち、④にかかわって、玄室の周囲では工具痕をとどめた石材加工剥片からなる間層を盛土中に確認し、古墳築造過程中に玄室の加工がなされる状況を確認した。また、土層観察から⑤→⑥→⑦に至る、埋葬施設の構築順序を明らかにした。

さらに、墳丘基盤造成に際して基壇を構築するなど墳丘裾の高さを一定にする工法をとらない点、玄室を地山上に厚く盛土した上に設置する点、盛土は水平にほどこすことを基本とし、墳丘の端の部分では土手状の高まりをつくる点など、築造方法にかかわる特筆すべき所見は多岐におよぶ。

出土遺物 上記した石材加工剥片のほか、須恵器と土師器が出土した。注



第50図 廻原1号墳埋葬施設透視図〔模式図〕

目されるのは、埋葬施設の前庭部や墳丘南西部の裾付近においてまとまった数の須恵器を確認した点である。一定期間におよぶ古墳祭祀の継続をうかがわせる資料群と考えられる。

古墳の築造時期を示す良好な遺物は少ない。墳丘盛土から出土した須恵器は、出雲Ⅰ期から出雲Ⅵ期、古代出雲Ⅱ期、国府第Ⅰ型式⁽¹⁾までにおさまるが、破片であるために時期比定に幅をもたせざるを得ない資料が多い。実際には、出雲Ⅵ期、古代出雲Ⅱ期、国府第Ⅰ型式にまでは下らず、確実な下限は出雲Ⅴ期にある点を確認するにとどまる。いっぽう、墳丘面直上から出土した須恵器には、出雲Ⅶ・Ⅷ期、古代出雲Ⅲ期、出雲国府第Ⅱ型式に属するものが目立ち、築造下限年代を示す。ただし、これら土器の年代が古墳の築造時期に結びつくわけではないという点には注意を要する。(岩本)

2 終末期古墳としての廻原1号墳の位置

墳丘 廻原1号墳の隅切方墳としうる墳丘に、八角墳など多角形墳にみられる外護列石など外表施設が備わらない点は、それらとは異なって墳丘の規格性に乏しい可能性を示唆する。繰り返すこととなるが、とくに古墳が立地する谷の最高所にあたる墳丘北東部では、隅部が直線的とはいいがたく、丸みをおびる。墳丘裾の高さを揃えるための基壇もみられない。そうした点を総合的に評価すると、方墳を指向しながらも地形の改変を最小限にとどめた結果として、隅部を深く整形するには至らず、隅切状の方墳を採用することになった可能性が高い。こうしたことから、廻原1号墳を多角形墳とするには無理があり、あくまでも方墳の延長線上としての隅切方墳と位置づけておきたい。

外表施設の有無という点で差があるが、平面形態の比較的類似する例に因幡地域の福本70号墳がある。その墳丘形態は、梶山古墳や蔵見3号墳、高野坂10号墳といった因幡地域の終末期古墳に共通する多角形墳と指摘される〔寺社下1997、谷岡・中原(編)1997、亀田2014〕。たしかに、これらが特異な墳丘形態をもつ点はみとめうる。しかし、多角形墳という規格的な墳丘形態とみるには、その形態はあまりに変則的である。個々の事例でも細部に違いがあり、むしろ規格性は乏しい。その立地を考慮すれば、廻原1号墳と同様にこれらの事例も周辺地形の制約に対応した墳丘整形にとどまったとする理解〔辰巳2015〕が、もっとも実状に即しているだろう。同じように、地形の制約をうけたとみられるいびつな墳丘をもつ終末期古墳として、加賀地域の金比羅山古墳〔浜野1983〕がある。

上記の古墳のおおよその築造時期は、高野坂10号墳が古くTK209型式段階、梶山古墳が飛鳥Ⅰ、福本70号墳が飛鳥Ⅰ新～Ⅱ、蔵見3号墳が飛鳥Ⅲ・Ⅳ、金比羅山古墳が飛鳥Ⅴ＝平城Ⅰとみられる。日本海沿岸部に分布するこれらの古墳には、7世紀中葉頃の舒明朝期と推定される大王墓での八角墳の採用に先行する例が存在し、その存続期間は終末期にわたる。出現時期の古さや時期のばらつきからも、これらは高い規格性をもつ多角形墳とは相違するものと考え(第51図)。

廻原1号墳も含めて、こうした規格性をやや欠如した多様な墳丘形態が併存する背景には、古墳時代終末期において墳丘形態にたいする規範が弛緩するといった事情を想定したほうがよいだろう。

埋葬施設 廻原1号墳の埋葬施設は、これまで関係性が想定されてきた畿内地域の横口式石槨とは空間構造・空間利用という点で性格を異にし、むしろ出雲型石槨式石室の特徴を強く保持する(第4章岩本論考)。出雲型石槨式石室の終焉形態として位置づけられ、玄室空間を遺体の埋葬空間と認識して「開かれた棺」を備える九州系横穴式石室のなかにあつて、遺体をおさめるための玄室をまさにそれにもっとも適した棺に置き換えた到達点ともいえる構造をもつ。それは九州系横穴式石室にみる葬送観念や他界観が、出雲地域において特異な発達を遂げた最後の姿といえるものである。埋葬施設の空間利用から、出雲が畿内と九州の境界に相当する位置にあつたようすが垣間みえよう。

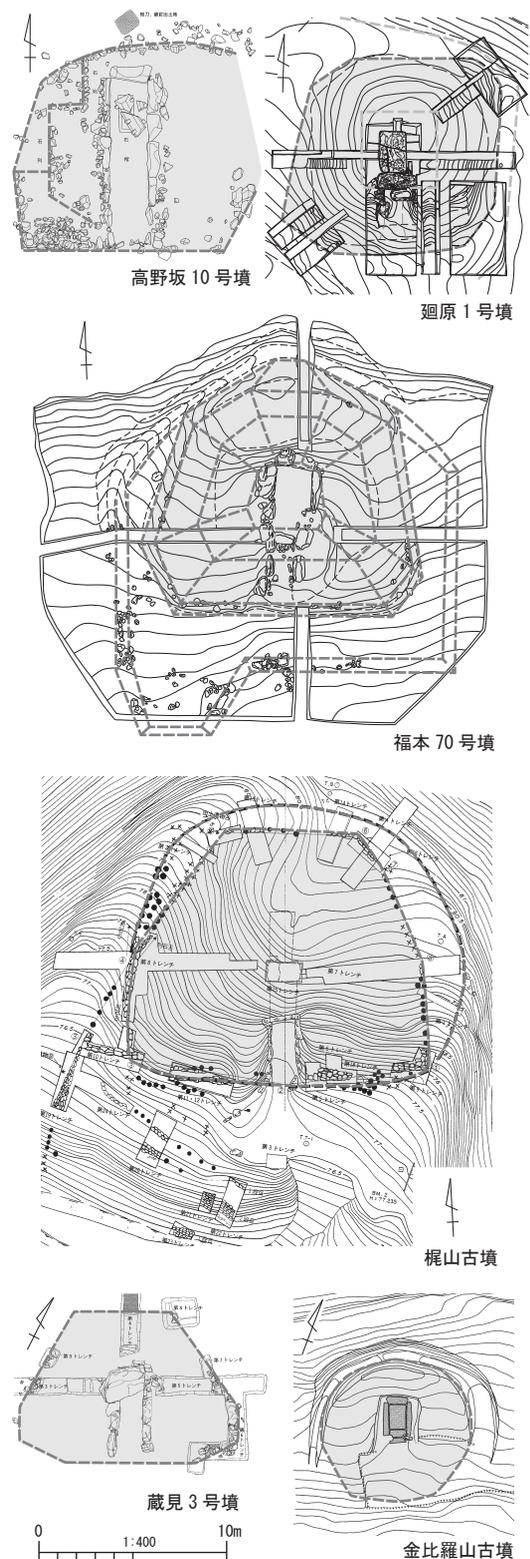
玄室周囲で出土した石材加工剥片から、古墳築造過程において玄室が加工された事実は、廻原1号墳築造の具体的な把握を可能とする。現地での石材加工は、製品の移動だけでなく石材産出地の石工が移動した可能性を新たな論点として示しうる点でも重要である。埋葬施設石材の現地での加工は、玄室の凝灰岩に著しく、羨道の安山岩では顕著でない。安山岩は凝灰岩のチョウナ削りによる切石とは異なって、剥離を主体とする割石である。加工技術と石材利用からも、廻原1号墳の埋葬施設を石棺式石室と近隣の横穴式石室との融合形態と評価できる（第4章磯貝論考）。さらに、出雲では古墳時代終末期に安山岩や花崗岩を割石として使用するが、畿内では安山岩はもとより硬質な花崗岩をも切石とする。古墳の築造に活用される石工技術に、同時期の出雲と畿内で相違点があることを指摘した。

年 代 廻原1号墳の築造時期は、出土遺物からある程度明らかにしうるが、良好な資料にもとづくものではない。そこで、埋葬施設からその年代を検討した。

その結果、単葬化を果たした出雲型石棺式石室の最末期型式であり、石棺式石室を模倣した石棺系模倣石室との対比においても末期型式と位置づけ、時期は対比しうる石棺系模倣石室から、おおよそ出雲6d期、古代出雲Ⅱ期を目安としうる（第4章岩本論考）。

この時期比定は出土した須恵器から想定される年代とも矛盾はみられず、出雲地域における相対的な年代観はおおよそ整合する。畿内地域との併行関係については、搬入品による交差年代によって決定するのが方法論的により妥当だが、双方の資料状況から須恵器の様相比較にとどまらざるを得ない。土器の特徴にみる様相比較では、つまみのある坏蓋の内面かえりが残るといった特徴の共通性を重視して、出雲6d期＝古代出雲Ⅱ期＝飛鳥Ⅲ・Ⅳという関係を想定しておく。

なお、廻原1号墳の築造時期に後出する須恵器型式である、出雲7・8期＝古代出雲Ⅲ期＝国府第2型式は、出雲国府「三太三」墨書須恵器によって726年以前に年代の定点をもつ。飛鳥Ⅲが660年代から670年代、飛鳥Ⅳが680年代から690年代、飛鳥Ⅴが藤原宮期（694年以降）とする年代観にしたがえば〔菱田2011〕、土器の様相比較による併行関係とそれぞれの地域の資料にもとづいて導き出された暦年代観に大きな矛盾はないことになる。したがって、安易に用いることは避けるべきだが、あえて廻原1号墳の築造時期を暦年代で示すならば、7世紀後半とすることができるだろう。（岩本）



第51図 特異な墳丘形態をもつ終末期古墳

3 ま と め

廻原1号墳の調査によって、出雲地域の古墳時代終末期首長墓の実態に、わずかばかりだが新たな光をあてることができた。得られた成果を端的にまとめるならば、それは古墳築造終焉期において、出雲地域の首長墓はその在地性を強く保持しつづけたという点につきるであろう。

こうした成果を生かすうえで、廻原1号墳の保存活用は地域的な課題の一つともなる。それに備えて、廻原1号墳の歴史的な意義を別の観点からも考究すべく、廻原1号墳の履歴を精査する試みも実践した(第4章加藤論考)。公文書と新聞記事という異なる性質をもつ過去の記録類の精査と検討によって、発掘調査時には失われていた廻原1号墳にかんする貴重な情報が得られた。論考でも指摘されているように、こうした取り組みは地域史を再構築する作業においてきわめて重要な意味をもつ。継続的な情報の蓄積と検討が不可欠といえよう。

また、活用への取り組みとして、墳丘と埋葬施設の三次元デジタル計測を実施し、その活用方法の一端を紹介した(第4章岡本論考)。得られたデータは、今後にさまざまに活用しうるであろう。

廻原1号墳を出雲地域さらには列島社会で位置づける試みは、ようやく緒についたところである。今後、さらなる研究の深化と地域文化財としての保存活用の双方が促進されることを期待する。(岩本)

註

(1) 以下、出雲地域の須恵器については、〔大谷 2001〕、〔岡田ほか 2010〕、〔稲田 2013〕の型式名を使用する。

引用文献

- 稲田陽介 2013「第10章 出土遺物の様相」『出雲国府跡—9 総括編—』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22 島根県教育委員会 pp. 201-282
- 大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 島根県出雲土木建築事務所・島根県平田市教育委員会 pp. 43-54
- 岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究—古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター pp. 13-43
- 亀田修一 2014「福本70号墳の銅匙が語るもの」『福本70号墳発掘調査報告書』八頭町教育委員会 pp. 41-53
- 寺社下博 1997「地方の多角形墳」『生産の考古学』倉田芳郎先生古希記念 同成社 pp. 83-98
- 辰巳俊輔 2015「八角墳の再検討」『明日香村文化財調査研究紀要』第14号 明日香村教育委員会 pp. 1-20
- 谷岡陽一・中原 斉(編) 1997『蔵見古墳群発掘調査報告書』福部村埋蔵文化財調査報告書第11集 福部村教育委員会
- 津川ひとみ 1994『史跡梶山古墳発掘調査報告書』国府町文化財報告書9 鳥取県国府町教育委員会
- 中野知照・松本美佐子ほか 1992『高野坂古墳群発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書第17集 岩美町教育委員会
- 中野知照・上田哲夫 2014『福本70号墳発掘調査報告書』八頭町教育委員会
- 浜野伸雄 1983「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『石川県立埋蔵文化財センター所報 拓影』第13号 石川県立埋蔵文化財センター pp. 2-5
- 菱田哲郎 2011「後期・終末期の実年代」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1 同成社 pp. 222-230

挿図出典

第51図 高野坂10号墳：中野ほか2014 第10図、福本70号墳：中野・上田2014 第2図を改変、梶山古墳：津川ほか1994 図3、蔵見3号墳：谷岡・中原1997(編) 挿図14、金比羅山古墳：浜野1983 第3図を改変